

# 噫七〇年<sup>あゝ</sup>

矢野誠一

誰にでもあるはずの幼児体験の最初の記憶。木下順二さんは自分の生まれたときの様子を記憶していると、なにかに書いていらした。三島由紀夫にもそんな話はながあつたときいている。そんな生まれたときのもの、でこそないが、私の幼児体験の最初の記憶は、世の言いまわしの「夢かうつつか幻か」ではなく、すこぶる明色である。

それははなやかにつきる提灯行列の光景のなかに身を置いた祝祭体験で、色とりどりの提灯が夜の街なかにゆれ動き、澄みきった冬の空にとけこんでいくようだった。笛、太鼓を吹き鳴らす山車屋台の上での、おかめとひよっとこの滑稽な踊りが子供「ころをくすくすり、お目出たい気分」にさせられた。大人たちが「南京

前だったが、満二歳だった一二年七月に日中戦争、そして国民学校に入学した一六年の師走に、当時は大東亜戦争と呼んだ太平洋戦争が始まった。ついでに記す国民学校というのは、昭和一六年に戦時体制に即応のため、小学校が改称された初等教育機関で、敗戦後の二三年に再び小学校に戻された。ちなみに一〇年三月生まれの私は、その第一期の入学で最後の卒業生となり、小学校を知らない稀有な世代の一人なのだ。

裏千家の茶人だった祖母が、昭和のはじめに建てた代々木八幡の家で育った。隣家に宰相だった近衛文麿のお婆さんが住んでいて、時どき祖母にお茶を習っていた。だから私は学校にはいる前から、妾だの、お困い者だの、二号さんといった言葉や、表札にある「寓」という文字の意味するだいたいのところを知っていた。あまり自慢になるはなしじゃない。新体制運動推進者の隣家訪問はなんとなく気配でわかり、夏など開けはなつた座敷の様子が庭「し」にうかがわれ、「ラジオの声とそっくりですね」と感嘆する女中を、「きき耳なんか立てるんじゃない」と祖母が叱っていたのを思い出す。

明治生まれの慶応ボーイだった父は、丸ビルにあつ

陥落！」と唱和しているのを真似て、「ナンチンタンラク」と舌たらずに叫んでいたと、これはかなりあとになって親から聞いた。

南京陥落。昭和二年二月二三日。日本軍が中国の南京を占領した日で、私は二歳九ヶ月になっていた。無論大虐殺があつたと知ったのは、日本敗戦後の成人してからだ。

ふりかえって見れば、私は銃後の少国民と呼ばれながら子供時代を過ごしたことになる。

いまはもう廃語になりかけている「銃後」と「少国民」を、愛用している三省堂の『新明解国語辞典』で引いてみた。【銃後】は、

「戦場の後方の意」直接戦闘に加わらないが、間接的に、なんらかの形で戦争に協力し、関係している一般国民。「――の守り」

とあり、【少国民】を、  
次の時代をになう、少年・少女。「おもに、第二次世界大戦中に国威発揚の一環として用いられた」と記している。

実際、子供の頃の記憶には戦争がついてまわって離れない。昭和六年九月に勃発した満州事変は生まれる

た日本車輛東京本社に通う平凡なサラリーマンだった会社帰りに寄つた銀座のモロゾフのチョコレート、ロンパンのシュークリームなどを土産に買ってきて喜ばせてくれたが、戦争が始まるとそんなことも少なくなった。子供「ころ」にもシヨックだったのは、パン食が決まりだった日曜の朝の食事の紅茶が、黄色缶のリップトンから粗悪な紙箱入りの日東紅茶にかわり、角砂糖が姿を消したことだった。

さて、銃後の少国民の遊びだが、一番人気と言つていいベーごまが、軍用機増産のための金属献納にひつかり、鉄製から陶製になってしまったのが悲しかった。手持ちの鉄製のベーごまは自主的に供出し、誰某は何個と教師が帳面に記録したものである。なかには持ごますべてを供出せずいくつか隠し持つてる悪少国民もいたが、教師も生徒も見ても見ぬふりをしてたうだ。

金属回収は各地に点在していた銅像にも及び、出征と称する献納式が行なわれ、忽然とその姿を消すのが日常の光景になっていた。御茶の水と秋葉原の中間にあつた万世橋駅前、広瀬中佐と杉野兵曹長の銅像ばかりはそれを免れ、敗戦後のいつときまで鎮座してい

やの・せいいち●1935年東京生まれ。評論家。落語、演劇などに関する多数の著書がある。近著に『さようなら昭和の名人名優たち』（日経プレミアシリーズ）、『昭和の演藝 二〇講』（岩波書店）。